tadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by

医学と文学の交錯

神谷　忠孝

序

文学者にして医師という例は外国で多く、日本でも江戸時代における本居宣長の例がある。自然科学と人文科学の違いはあっても人間を対象にするという共通点があり、両者の交錯するところに「命」に対する新しい視点が見出せるのではないかと考えてみた。私がこのテーマに取り組んだきっかけは、北海道大学の教養科目として総合講義「がんー医学・生物学から人文・社会科学へー」に参加した二十年前からである。年度によって多少変動はあるが科目名を列挙すると次のようである。「癌の原因」「癌と生体」「癌と免疫」「癌細胞の特性」「癌と生命倫理」「癌の遺伝学」「癌と文学」「癌と環境」「癌と法」「癌と死生観」「癌の内科的診断と治療」「癌の外科的診断と治療」「癌の予防」などである。二年生が対象で医・歯・薬学の学生を中心に全領域にわたる学生が受講している。この中に文学が入っているのは病気の体験を冷静に記述できるのは文学者であるという認識に基づいているかだろう。看護士養成の機関では以前から行われていたことが拡大されたのである。今後ますます医学教育のなかで需要が高まってくると考えて中間発表のつもりで本稿を発表する。

第一章　医学を学んだ文学者

一、森鴎外

森鴎外（一八六二～一九二二）は十三歳で第一大学区医学校（東大医学部）予科に入学。この時年齢不足のため万延元年生まれとして二歳を加え、のち公称の際はこれに従った。明治十四年卒業。文部省の留学生として海外渡航を望んだが果たさず、父母のすすめる陸軍に入った。明治十七年、東大から陸軍入りした同期生のトップを切って衛生学と陸軍医事調査のためドイツ留学に出発。明治二十一年帰国。留学時代のことを素材とした小説「舞姫」（明治二三）で作家としの第一歩を踏み出した。明治四〇年、陸軍軍医総監・医務局長となった。四十九歳のとき発表した「妄想」（『三田文学』一九一一・三～四）は自分の思想遍歴を書いた小説で、終わりのほうに死についての考え方がでてくる。その部分を要約する。西洋の小説を読むと「自我」が中心になっていて、西洋人は「自我」がなくなることを苦痛と考え、死を「自我」がなくなると考える。それに対して自分は、「単に我が無くなるという丈ならば、苦痛とは思はれない」といい、「自我」は生きて

いる人間のもので死後の「自我」は考えの外にあるという立場を表明している。

では何が苦痛かといえば、死ぬ前の肉体的苦痛と「自我」がある間に「それをどんな物だとはつきり考へても見ずに、知らずにそれを無くしてしまふのが口惜しい。残念である。漢学者の謂ふ酔生夢死といふやうな生涯を送つてしまふのが残念である」という。そして死生観をつぎのように書いている。

自分は此儘で人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つて居る。

併しその死はこはくない。人の説に、老年になるに従つて増長するといふ「死の恐怖」が自分には無い。

若い時には、この死といふ目的地に達するまでに、自分の眼前に横はつてゐる謎を解きたいと、痛切に感じたことがある。その感じが次第に痛切でなくなつた。次第に薄らいだ。

十年後、結核が悪化したことを自覚した鴎外は、知人や家族にも病気を隠し、医学による延命も図らず死を自然に受け入れた。その強い克己心は武士道につながるものがあった。

「高瀬舟」（『中央公論』一九一六・一）では安楽死の問題を扱っている。「高瀬舟縁起」（『心の花』一九一六・一）では、死に瀕している病人がいて、それを救う手段がまったくないという場合に、その苦しむ姿を見てどうすればよいかという命題を立てる。「たとひ教えのある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦しみを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る」とし、苦痛を取り除く麻酔薬を与えることで、死期は早まるかもしれないが、苦しみを放置するよりはよいという考え方もあるとする。従来の道徳は死期を早めることに批判的だが、医学社会にはユウタナジイ（楽に死なせる）という考え方もあることを紹介し、「高瀬舟」をかいたのはユウタナジイを知らせたいからだと書いている。鴎外は早くに「甘瞑の説」（一八九八）という外国の安楽死学説を翻訳した文章がある。一九〇八年一月に弟篤次郎が喉に血膿が詰まって窒息死したこと、その翌月に次男の不律が百日咳のため二歳で死んだこと、同じ頃に六歳の長女茉莉が百日咳で苦しむのを見てモルヒネで安楽死させようとした経験（これは一九〇九年十月の「金毘羅」で描かれる）などのことがあり、安楽死は身近な問題であった。鴎外をさきがけとする医学を学んだ文学者は多いが（注1）、既発表の論文と重複しないかたちで以下に取り上げる。

二、上田三四二

上田三四二（一九二三～一九八九）は歌人・評論家・作家。京都大学医学部卒業。結核専門医。一九六六年、四十二歳のとき結腸ガンの手術に成功。手術後十一年目に「内なる自然」の題で、『文体』創刊号

（一九七七・九）から五回にわたって連載したものを、『うつしみ―この内なる自然』（一九七八・一一、平凡社）として刊行した。

「あとがき」で作者は、「十年ほどまえ、大病をした。それがふしぎに癒されて、こんにちまで生きのびている。その鉄槌のようにやってきた死のおびやかしと、手術のときの全身麻酔による一種の死の体験と、その後の再発の不安をともなった何年かの歳月は、私に、身体を中心に据えて生死のことを識りたいという思いを切実に植えつけた。（改行）実存の語は使わなかったが、この一冊は右のような体験より出た身体論―精神と身体に関する試論ともいうべきもので、半ばは体験記、半ばは論考にかたちをとりながら、全体としては融合して、一個の文学作品の体をなしてほしいというひそかな願いをもって書かれている。」と記している。

『うつしみ』という本が貴重だと考える理由は、医師が病気になり患者の立場から闘病記を書いたということ、しかも記述する本人が文学者として実績があるという点が前人未踏だからである。医師として病気を冷静に受け止める自然科学的な眼と、一患者として死への恐怖におびえる自分を正直に記述する人文科学的な心情が交錯している。このことは、竹中文良著『医師が癌にかかったとき』（一九九一・三、文藝春秋）と比較してみるとはっきりする。三十年余、診療と手術に明け暮れ五十半ばで大腸癌手術を体験した著者は終始医師の視点をはずさない。これはこれで貴重な体験記であることはたしかだが、病む人間の内面には踏み込んではいない。その点で『うつしみ』との違いは明瞭である。

『うつしみ』のはじめのほうで著者は精神と身体の分離について書いている。二時間半にわたる開腹手術のあとの記述はこうである。

あの私には一瞬の、客観的には二時間半の手術時間をふくむ何時間かの空白は何だったのだろう。のちしばしば考えて、考えの落ちてゆくところに、あれは死だ、という答えが返ってくる。

感覚が開いたまま停止している普通の睡眠とちがって、この麻酔による昏睡では感覚は完全に消滅し、意識も容易に呼び戻しようのない遠くへ追いやられる。そこでは生のざわめきはかげをひそめていた。そのとき私が置かれていたのは能うかぎり生に遠い地点、いわば生の崖っぷちであった。麻酔の深度がほんのすこし深くなるだけで、私は容易にその崖からずり落ちただろう。それに崖の肩は、手術という暴力的な侵襲がそこに加わるために、脆くなっている。私は辛うじて生の界面にとどまっていたが、それは生とも死ともつかぬ宙ぶらりんの状態であり、何かほんのちょっとした、ろうそくを吹き消すほどの偶然の風の一吹きも、私を崖の向うの闇に押しやるのに充分だった。

麻酔が効いていた時間は意識がなかったから「あれは死だった」と考え、生のあやうさに思いいたるという臨死体験が語られている。意識がないことを記憶の停止と考えず死を連想するところがユニークで

ある。著者は何を言いたいのだろう。次のように書いている。

この麻酔による死の予行は、私に死を以前ほど怖いものと思わなくさせる効用をもった。何もなくなるということは限りなく怖ろしいが、その怖ろしさは観念上の怖ろしさであって、実際は眼を閉じて、そして開けるだけの瞬時の眠りとちっともかわらない。ただ開けるときが多分永遠に来ないだけだが、それとてこの眠りの無時間性、無内容性に何の変化が生じるわけでもない。死はほんのちょっと眠るだけだ。ほんのちょっと。そして夜毎の生理的な睡眠は、私が麻酔という昏睡によって行った死の予行のそのまた予行のように思われ、熟睡から浅眠まで、また夢の多い眠りから夢の覚えのない眠りまで、その程度はいろいろだとしても、夜毎にこんな眠りを怖れなく、それどころか安らぎの時間として持つ以上、死はますます怖れるに足りないと思われてくるのである。

著者はこのあと、兼好の『徒然草』における生死観についてかなり深入りするかたちで考察している。それは単なる古典鑑賞ではなく、死を身近に体験したことで身につまされる思いで古典を再読して自分の進路に及んでいる。著者が『徒然草』を己にひきつけて読むきっかけは、手術から七年目、下血に見舞われた時である。さいわい大事にはいたらなかったが、以前よりも「無常」の思いを濃くして『徒然草』を読み返し「隠遁」の志をたてたという。『徒然草』第百八段の「もし、人来りて、我が命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか頼み、何事をか営まん」という文章にふれて、「明日は死ぬ身と知ったとき、人は何をするだろうか、と兼好は問う。そして人間はみな、この明日知れぬ身ではないか、と彼は畳みかける。無駄なことなどしている暇のあろうはずはないのである。」と書いている。

『うつしみ』の主題は、死の恐怖をくぐり生の側に生還してきた経験を踏まえて、そこから生への慈しみを抽出して「内なる自然」を我がものとしたところにある。次のような文章にそのことが表出している。

要するに私はこのとき身体であった。泥のような一個の身体であった。そして誇張していえば、意識はまだそこに芽生えていなかった。手術場にいたとき私は意識なき一個の身体であり、身体というよりは大方一個の物体であったが、そこから引き出されたのちも、私は辛うじて身体であって、意識ではなかった。これが私の生の基底であり、この生の基底にうごめいている初原的な身体感覚が、わずかに意識と呼べば呼べるものであった。

こんな言い方でもって、私に何が言いたいか、推量のつく向きもあるかと思う。私は手術場を母体にたとえて、そこからもういちど娑婆に戻って来た自分を第二の誕生に比定しているのであ

る。麻酔による死の予行は、そのまま新しい生の準備でもあったわけだ。（中略）

こうして私はこの世にふたたび生を享けた大きな嬰児であった。嬰児は身体として生れ出る。術後に私の学んだのはその身体だった。そして意識は身体の窪みにいつ知れずたまる水のようなものとして、つまりは気力の回復とともにやってきたのである。

著者は、二十年にわたって携わってきた医者を辞める。五十歳のときである。退職金で庭の隅に草庵をしつらえ、「隠遁」を実行に移した。それは同時に文学者としての再出発であった。それまでの短歌中心の文学活動に加えて小説にも活動を広げている。

『惜身命』（一九八四・十、文藝春秋）は八編からなる連作短編集である。作者の分身と思われる「関屋」という医師が同僚の医師、担当した結核患者、短歌の仲間などの闘病生活と死について、抑制のきいた文章で描写している。全編にただよう無常観は関屋という語り手が、自身も癌手術体験者という設定がなされているからだろう。

三、南木佳士

南木佳士（一九五一～）は秋田大医学部卒。「ダイヤモンドダスト」で芥川賞受賞。『山中静夫氏の尊厳死』（一九九三・一一、文藝春秋）で肺癌末期の患者を扱っている。信州の田舎町にある総合病院に勤務する今井のところに山梨県の総合病院の紹介状をもった山中静夫がやってくる。山梨のほうが自宅から近いのだが、肺癌の末期なので生まれ故郷の信州で死にたいという。入院した山中は日中しばしば外出するので理由を聞くと、実家は両親も兄も死んで廃屋になっているが家の裏にある墓が荒れたままなので手入れに通っているという。妻を呼び出して事情をきくと、山中は入り婿で郵便配達に従事していること、墓を掃除しているのは自分がそこに入りたいからだろうと妻は語る。

その後今井が山中に面談すると、墓掃除は口実で本当は妻にも内緒で自分の墓をつくっているのだと山中は言う。山中の病状が進み、足が麻痺して歩けなくなると自然に死にたいと言って食事を拒否したりするが、説得して放射線治療を施していく。腰椎に転移して痛みを訴えはじめた段階に至って、今井は山中に末期医療を行うことを告知する。それを聞いた山中は、「先生。苦しくなったら楽にして下さい。私が苦しいと言ったら楽にして下さい。何も言えない状態になっても、苦しそうだったら楽にして下さい」と尊厳死を要望する。今井は、「山中さん。あとはモルヒネを使います。点滴の中に入れて、苦しくなったら量を増やします。そうすれば苦しくなくなります。眠ってしまいます」と説明する。山中はほっとした表情を見せ、辞世の句だと言って、「楽に死ねそうな気がしてふる里の山見ゆ」という句を書いてしめす。種田山頭火が好きだという山中と今井の山頭火についての話がはずむ。

『山中静夫氏の尊厳死』が提示しているのは「尊厳死」の問題である。「日本尊厳死協会」（注2）に加入していれば簡単なのだが、山中のような場合、医師と患者との合意が必要になる。尊厳死協会の会員証には配偶者や親族の同意署名欄があるのだが、山中の場合は妻の存在が厄介である。夫の苦しむ姿を見て妻は「楽にして下さい。なんでもいいから楽にして下さい」としきりにせがむ。今井はそれに対して、「山中さんは今でも呼びかければしっかり答えてくれます。判断力もあります。その人が楽にしてくれと言ってるんです。死にたいとは言っていません。それに、今の山中さんに死にたいですかなんて聞けますか」と応じる。判断力があるうちは死なせはしないという患者との約束を今井は貫くのである。

山中が死んだあと、山中の妻から内緒で墓を建てたことを知って憎らしくて早く死なせるように言ってしまったことを詫びる手紙が届く。今井の述懐として、尊厳死にたちあうにあたって、実行するために医師が心身ともに疲れるという本音が述べられている。実行することにともなう家族との葛藤を書いたところにこの作品の意義がある。

注1　以下、生年順に医学を学んだ文学者を挙げる。

一、真山正果　一八七八―一九四八　小説家・劇作家。明治三十年第二高等学校医学部に入学。移民熱にかられて退学、家人の反対をおして上京したが体格検査にはねられて目的を達せず医学部に再入学した。三十三年ふたたび退学し病院の薬局生、開業医の代診などを勤めて各地を転々した。短編集『南小泉村』が出世作。

二、斎藤茂吉　一八八二―一九五三　歌人。明治二十九年、山形の上山小学校高等科を首席で卒業。親戚の医家斎藤紀一の招きで上京、翌年東京府開成中学校入学。医を志して第一高等学校理科に入り、三十八年七月斎藤家に入籍。九月には東京大学医学科に進んだ。明治四十二年歌誌「アララギ」の編集実務を分担。大正三年、斎藤家の長女輝子と結婚。六年一月、東大助手並びに付属病院勤務を辞し長崎医専教授として赴任。大正十年から三年間、文部省在外研究員として欧州に留学。帰航の途中に養父の経営する青山脳病院全焼の悲報に接し、失意のうちに十四年一月帰国した。再興に努力を傾けるとともに歌壇に復活。昭和二年、青山脳病院長に就任。代表的歌集に『赤光』、『あらたま』、『白き山』がある。

三、木下杢太郎　一八八五―一九四五　詩人・劇作家・小説家。本名太田正雄。一校理科を経て明治四十四年、東大医学部卒業。専攻は皮膚科。「パンの会」を興し詩誌「屋上庭園」創刊。明治四十五年、皮膚科教室に入り土肥慶蔵教授のもとに副手となる。大正五年、南満州鉄道会社経営の南満医学堂教授兼奉天病院長として大陸に赴任。このとき、詩人・作家の生涯に終止符をうった。時に三十二歳。大正十―十三年外遊。帰朝直後愛知医科大教授となり十五年に東北大学に転じた。昭和十二年には東大医学部に移って皮膚学講座を担当。十六年には世界的業績と目された太田・ランジェロン分類を発表してレジオン・ドヌウル・オフィシェ勲章を授けられた。大陸の古美術、古典に造詣がある。「木下杢太郎全集」全十二巻、岩波書店。

四、竜胆寺　雄　一九〇一―一九九二　慶応大学医学部に進んだが昭和二年中途退学。昭和三年四月、雑誌「改造」の十周年記年号の懸賞小説に「放浪時代」が当選。新興芸術派の旗手として活躍したが昭和九年に文壇から離れて沈黙した。戦後復帰し著書約百冊を数える。サボテン栽培の権威で日本砂漠植物研究会を主宰し、月刊「カクタス研究」を発行した。

五、藤枝静男　一九〇八―一九九三　小説家。千葉医大卒、眼科医。「イペリット眼」（一九四九）で芥川賞候補となる。代表作は「兜徒津田三蔵」（一九六一）。

六、斎藤茂太　一九一六―　随筆家。斎藤茂吉の長男。昭和大医学部卒。精神科医。「快妻物語」

七、河邨文一郎　一九一七―　詩人。北大医学部卒。札幌医大名誉教授。「河邨文一郎詩集」

八、加藤周一　一九一九―　評論家・小説家。昭和十八年東大医学部卒。戦時下、東大付属病院の内科教室で無給の副手として過ごし、中村真一郎、福永武彦らと「マチネ・ポエティーク」を作り詩作に励んだ。岩波新書「羊の歌」（一九六八）に医師時代が回想されている。

九、山田風太郎　一九二二―二〇〇一　小説家。東京医大卒。「甲賀忍法帖」

十、庄司　肇　一九二四―　小説家・評論家。九州高等医専卒。眼科医。きゃらぼんの会主宰。

十一、安部公房　一九二四―一九九三　小説家。東大医学部卒。「壁―S・カルマ氏の犯罪」（一九五一）で芥川賞受賞。

十二、北　杜夫　一九二七―　小説家。斎藤茂吉の次男。精神医学博士。東北大医学部卒業後、慶応大学病院の助手となる。「夜と霧の隅で」（一九六〇）で芥川賞受賞。

十三、岡井　隆　一九二八―　歌人。慶応大医学部卒。歌集『禁忌と好色』、評論『正岡子規』

十四、なだ・いなだ　一九二九―　小説家。慶応大医学部卒。『パパのおくりもの』『権威と権力』

十五、加賀乙彦　一九二九―　小説家。東大医学部卒。精神科医。『宣告』、『永遠の都』

十六、渡辺淳一　一九三三―　小説家。札幌医大卒。『冬の花火』で中城ふみ子を描く。「訪れ」（角川文庫『死化粧』）で晩年の亀井勝一郎を描く。

十七、篠田達明　一九三七―　小説家。名古屋大医学部卒。愛知県心身障害者コロニー総長。『闘う医魂―小説北里柴三郎』『にわか産婆・漱石』

十八、石黒達昌　一九六二―　小説家。北海道生まれ。東大医学部卒。『最終上映』

十九、石黒　耀　一九七四―　小説家。宮崎医大卒。大阪市在住の勤務医。巨大噴火で日本が壊滅の危機にひんする小説『死都日本』でデビュー。

〔以上は「日本近代文学大事典」「文芸年鑑」等を参照の上作成〕

注2　日本尊厳死協会は一九七六年発足の日本安楽死協会にはじまるが、安楽死という言葉が第三者による安楽殺（慈悲殺）と誤解されやすいという理由で、一九八三年、日本尊厳死協会と改称された。

会員証にはリビング・ウィル（尊厳死の宣言書）として次のような文章が載っている。

一、私の病気が、現在の医学では不治の状態であり、すでに死期が迫っていると診断された場合には、徒に死期を引き延ばすための延命措置は一切おことわりいたします。

二、但し、この場合、私の苦痛を和らげる処置は最大限に実施して下さい。そのため、たとえば、麻薬などの副作用で死ぬ時期が早まったとしても、一向にかまいません。

三、私が数カ月以上に渉って、いわゆる植物状態に陥った時は、一切の生命維持措置をとりやめて下さい。

以上、私の宣言による要望を忠実に果たして下さった方々に深く感謝申し上げるとともに、その方々が私の要望に従って下さった行為の責任は私自身にあることを附記いたします。

署名

第二章　文学者とガン

一、日野啓三（一九二九〜二〇〇二）はアフリカ旅行を計画し、数年前に胆石が出来かかっていると診断されたので念のため健康診断を受けて腫瘍がみつかり手術を受けることになった。手術前の心理について『断崖の年』（中央公論社、一九九二・二）で次のように書いている。

苦しい状態に陥ったとき、多くの人がそのように、まずすべてを必然と思い、さらにそれはみずから望んだ贖罪ないし再生の機会なのだ、と考えるのだろうと思う。私自身そういう思考をこれまでほとんどしたことがなかったので、初めは実感したくなかったけれど、手術の予定日が三日、二日後と迫ってくるにつれて、本気でそう思うようになった。そして象徴的な死と再生の儀礼という考えは、意外に心を安めてもくれた。思いきり古い自分は解体されろ、とさえ思った、苦しんで。

腎臓癌の手術を受けたあとの身体と精神に起こった変化について次のように書いている。

手術の前に極度に不安だった時、彼が身にこたえて思い知ったのは、生死の境界を目の前にすると、ほとんどのことはどうでもよいことだった。そしてどうでもよくない数少ないこと、いや最も重要なことが〝現実〟ということだった。自分は本当に現実を生きているか、存在しているか、いまこの身のまわりに見えていること、生きてきたと思っていることは、果たして本当に現実なのか。

意外なことに、入院中も、手術の前夜でさえも、彼は彼自身の過去のことをほとんど考えなかった。あの時は良かった、というようなことを。また恨みがましい思いもなかった。それよりも心にかかり続けたことは、半世紀以上生きて感じて考えてきたの

に、これこそが現実だという感触を、まだぎりぎりの透き通るような実感としてつかんでいないということだった。

退院後も転移を予防するための免疫強化剤の注射をうつために一日おきに通院する生活が続く。日常において時として幻覚をみるようになる。

ラクダの列が心の果ての地平を過ぎてゆくのがかすかに見えた。白と黒の羊の群れを追って老人がよろよろと歩いてゆく。泥の小屋の前に何人かの人たちが立ちつくしている。ぼろ布をまとって黙って。

全身をしぼられるような懐しさと悲しさが骨を噛んだ。きっと自分の肉体的生命は五十何年かで終ることになっていたのだ、と彼は思った。超音波診断装置（エコー）という新しい機械で偶然に深部の腫瘍が早目に発見されていなかったら、間違いなくいま頃は末期症状の床に横たわっていただろう。そう言えば病院の屋上に現れた人たちの中に、頭巾つきの裾の長い灰色の修道士のような寛衣を着た跣の人たちもいた気がしてきた。（中略）

世界が二重に見え始めた。これまで現実と思ってきた世界の裏側から、本当の現実が滲み出してき始めたのだろう。偶然の個人的な経験のあいまいな記憶から成っていた彼の意識の表面の奥から、本当の記憶が甦ってきたのだろう。歯がガチガチと鳴るほど恐しく、そして肉が溶けるように快かった。

少なくともいままで生き残り続けたということは、自分にはまだ見出すべきものが残っていたからだろう、と彼は思った。世界にも自分の内部にも、しっかりと意識化しなければならないことが。

そして、次第に「書く」ことへの自覚が再燃してくるのだが、それは病気になる前とは違った感覚である。「（書くという行為は決して純粋に意識の問題ではない。手自体の禍禍しさが働いている）」「書くということは、口では言い難いことを言い、目には見えないものを見、耳には聞こえない音を聞く不逞な行為だ。意識では考えられないことさえ考えてしまう」というような不思議な覚書が挿入されている。『断崖の年』という作品で日野啓三が表現したことは、死の淵から甦って「生」の意味を問い、体験記ではなく文学作品としてかたちにしようとする文学魂であった。

二、中上健次（一九四六～一九九二）は一九九一年九月頃から左脇腹に痛みと腫れの自覚症状がありやがて腎臓癌と判明、翌年一月二十七日熊野で入院、二月十四日、慶応病院で腎臓摘出手術をした。腎臓癌を手術したあと、渡部直己との対談「シジフォスのように病と戯れて」（『文学界』一九九二・五）で次のように語る。

四十五歳で、腎臓は末期癌で摘出しないとどうしようもない。ラッキーなことに片一方が正常に動いてるというから、片方を摘出すればこっちのほうは大丈夫。肺は八個まで空洞ができているというから相当進行している。普通ならオタオタしなくちゃならない状態だけど、考えてみたら、癌がもたらす意味みたいなものをおれはずっと考え続けてたんじゃないかなと思ったわけ。不条理な病であり、人を存在に眼をむけさせて思索家にする病ですが、今までこの癌というものがもたらす意味と無縁ではなかった。シジフォスですよ。マロニエの根っこを見つめて吐くあの男ですよ。

癌というのは、一つにはエイズと同じように人に急激に老いを与えるということだね。それから、死までの時間を急激に縮める。その二つであるわけだよね。老いを与えるということは、衰弱を伴ったり苦痛を伴ったり、あるいは不如意を伴ったりすることだけど、死にしろ老いにしろ、それはずっと考え続けてきたことなんだよ。それを人は文学と呼んできた。

癌がなぜ特別な病みたいに見えるかというと、老いと死を急激に展開するからにすぎない。そうすると、癌と戯れて生きることができるのではないか。癌を怖がることはないのではないか。そう思ったんだね。だれでもそうだろうけど、自分があと何年生きられるか、あとどのくらい人生の時間があるか、知りたい。

中上健次は意欲的に生きることを願った。だが癌は脳にも転移したことが家族に告知されたとき、中上は何を感知したのか「熊野へ連れていってくれ」と言い出し新宮の実家に戻り、勝浦から友人の日比医師が点滴に通ってくれた。七月、那須勝浦の病院に入院し八月十二日に永眠した。四十六歳であった。

没後、妻の紀和鏡が書いた「中上健次と〝姉の力〟」（『別冊文藝春秋』一九九三・四）には発病から臨終までの様子が書かれている。

第三章　その他の文学者

一、中江兆民　一八四七―一九〇一　評論家・思想家。一九〇一年四月、喉頭ガンで余命一年半と診断され六月頃から「一年有半」の執筆を開始し八月初めに脱稿、その後も「続一年有半」を書き十二月三日に没した。

二、中城ふみ子　一九二二―一九五四　歌人。昭和二十七年「左乳腺単純ガン」と診断され左乳房切除。翌年右乳房に転移して再手術。二十九年再発して皮膚、肺に転移。二月、「短歌研究」五十首入選の報、四月号に「乳房喪失」発表さる。

三、高見　順　一九〇七―一九六五　小説家。昭和三十八年十月、食道ガンの宣告を受け手術して十一月退院。三十九年六月千葉大で再手術。四十年三月再々手術、八月十七日死去。病床から発表された詩集『死の淵より』（一九六四）、中村真一郎編『高見順・病床日記』（一

九九〇）がある。

四、川上宗薫　一九二四―一九八五　小説家。昭和五十七年二月食道ガン。本人に知らせず食道潰瘍として手術。『生還の記』を発表。五十九年十二月リンパ腺に転移、『俺はガンだぞ、文句あっか』を発表。六十年十月十三日死去。遺作『死にたくない』（サンケイ出版、一九八六）

五、沢野久雄　一九一二―一九九二　小説家。昭和五十八年三月肺ガンを告知されて手術。昭和六十年五月『生きていた―「ガン」からの生還』（主婦の友社）を発表。

六、吉村　昭　一九二七―　小説家。中学二年のとき肺疾患。昭和二十二年学習院高等科に入学したが休学し左胸肋骨五本を切除。二十五年復学。二十八年中退、津村節子（芥川賞作家）と結婚。『冷たい夏、熱い夏』（新潮社、一九八四・七）は弟の死を扱った作品で、「告知」をテーマにしている。

七、開高　健　一九三〇―一九八九　小説家。食道ガン末期の病床で書いた「珠玉」（『文学界』一九九〇・一）には性を通して生命への賛歌が描かれる。

八、重兼芳子　一九二七―一九九三　小説家。北海道生まれ。一九七九年「やまあいの煙」で芥川賞。一九九一年にガンの告知を受け大腸の半分と肝臓の半分を切除。闘病中もホスピスボランティアの仕事や講演・執筆活動を旺盛につづけた。死後『いのちと生きる』（中央公論社、一九九三・八）、『たとえ病むとも』（岩波書店、一九九三・十二）が出版された。

九、中島　梓　一九五三―　小説家。別名・栗本薫。一九九〇年、乳ガンの手術を受け、退院後『アマゾネスのように』（集英社、一九九二・十一）で闘病記を公開した。

〔参考文献〕

渡辺淳一『冬の花火』（角川文庫、一九七九）、
児玉隆也『ガン病棟の九十九日』（新潮文庫一九八〇）、
柳田邦男『ガン五〇人の勇気』（文春文庫一九八一）、
佐多稲子『夏の琴』（新潮文庫一九八三）、
千葉敦子『よく死ぬことは、よく生きることだ』（文春文庫一九八七）、
中島みち『がん病棟の隣人』（文春文庫、一九八七）、
大野　芳『がん生還者の記録』（講談社文庫一九八九）、
向井承子『たたかいはいのち果てる日まで』（ちくま文庫、一九九〇）、
スーザン・ソンタグ『隠喩としての病い』（みすず書房、一九九〇）、
野原一夫『肺ガン病棟からの生還』（新潮社、一九九〇）、
小島直記『鬼よ、笑え―「旅の夏」「ガンの夏」日記―』（新潮社、一九九二）